

『歌集 広島』一九五四（昭和二九）年刊、より

伊藤春江（旅館業）  
姉といふ顔はやたらに焼けただれ声でこそ知れ面影もなし

板舛雪江（無職）  
水求むる女学生の声やみて見返れば眼を開きたるままかすかに瘡  
攣しをり

井上清幹（無職）  
焼けあとの仮救護所に蒸れてゐる臭ひはげしき火傷膿汁

今元春江（文選工）  
羨望の的となりたる美貌さへ彼の日を境に顔そむけらる  
我が鼻ももぎたき程の腐臭にて歩めば蠅がブーンと逃ぐる  
モルモットにされに行くなどA・B・C・Cの被爆調書をやぶりて  
捨つる

岡田逸樹（警察官）

焼け切れしシャツ持ちて恥部を覆ひたる女が水乞ひて吾に寄り来る

加納節尋（元写真真師・守衛）

むくろ守る人も棒もて追はれ居り旬しゅんの葡萄を食ひ荒らすとて  
火の街ゆ赤子抱へて居る少女炒り米噛みて含ましめ居り

川手亮二（学生）

死体浮くプールの水を貪り飲む女子学生のやき腫れし唇

河内 格（獣医師）

広島乙女の顔のケロイドはアメリカのなせし烙印にして

神田満寿（無職）

声涼しくアリランの唄歌ひたる朝鮮乙女間もなく死にたり

黒田秀実（教員）

進み出て徴兵反対の署名せりもはやためらふ時にあらずと  
「ヒロシマ」と伝ふる声さへ危険視すその根源を今ぞみきはむ

小堺吉光（公務員）

頭から水槽に突つ込みたるままの遺骨が今は崩るるらしき

小森正美（商業）

生きの身を火にて焼かれし幾万の恨み広島の天にさまよふ  
原爆の責任裁判あつて良し戦勝国に罪無しとは人道にあらず

河野淑子（主婦）

こと切れし母とも知らずその乳をまさぐるよこの盲ひたる児は  
幽霊か死の行列か半裸全裸人間檻樓（らんる）の列が続きぬ

河野富江（無職）

生ける身のままをやかれしその苦痛が吾のからだに直につたはる  
やけただれ丸太のごとくならびたる人の死のむれ忘るる日なし

杉田はつよ（無職）

化膿して口もつむげぬ中学生かすかに舌で「アカータン」とつぶや  
く  
ケロイドに乙女の夢を奪はれし級友の名を窃盗罪で知る

竹内多一（無職）

戦争の下請けせねばこの国はたたざるごとき日日の論調

原爆乙女の顔面整形を援助すとスターらサインす花やかに悲し

A・B・C・Cへ比治山山上を提供し市長は行けりアメリカへの旅

斗山藤子（主婦）

横たはる死がいはいくさりてはみ出した腸は長長と道にたれおり

研谷サダ子（主婦）

美しき乙女と見しに片頬のケロイドに気付きまみ伏せぬ我

名柄敏子（酒類商）

焼けただれうみ噴く吾子の五体のせ阿修羅の救護所に手押車引く

さながらに松の丸太を積む如く硬直せる死体トラックに積みぬ

濠内に妻を呼びつつ息たゆる鮮人の声しみて忘れず

中川雅雄（会社重役）

共同作業地区に累累と並び居る半面焼けたる学生の死屍

記念品と名附くに瓦の破片売れ原子沙漠をわれら漁りぬ

再軍備するとふ人よ銃とりて新戦場へ君独りゆけ

中邑浄人（教員）

親呼びて叫びたらむか口開けしまま黒焦げし幼児の顔  
竹棹もて屍体寄せせる兵あれど橋ゆく人ら見返りもせず

西田郁人（鉄道員）

しかばねの山に分け入り油そそぎ火を点けてきつと走り去る兵士  
らのあり

西原三重子（教員）

ふくれたるむくろにつどふ蟻のむれ近づけどなほ人をおそれず  
路路に幾百の裸体むくろとなり悪臭放つに息とめて歩く

西本昭人（公務員）

原爆のケロイド残りしこの吾を罵る子等を叱りもならず  
をじちやんの顔何うしたのと聞く子等に直ぐに答へる言の葉出で  
ず

過ちは繰り返しませんと云ふ裏に再軍備は早着着進みぬ

新田隆義（電鉄車掌）

原爆に耳を焼かれし我が妹はイヤリングなど欲しがらぬなり  
父を返せ母を返せと壇上に叫ぶ乙女のケロイド光る

白島きよ（無職）

いななきも動きも得せず火傷負へる軍馬は焼けたる樹につながれて

命のみ生きながらへて幸ならずある時は爆死を羨しみにけり  
ここにまた夏は来りて草しげる地に幾万のいかりはひそむ

橋本桃村（教員）

屍体を掘り屍体を焼けり校庭の柳しだれるほとりに今日も  
原爆の厄にも遭わで富めるらが再軍備説くを我はかなしむ

原田君枝（主婦）

狂ほしく我が喚ぶ声にこたへしかひくき呻きのいずこよりか聞ゆ  
「許させ」と掌を合わせつつ救い呼ばふ人を見過し夫護りてゆく  
屍を焼くとふ薄青き煙流れ来ぬ居合す人等皆合掌す

平野美貴子（無職）

大根を重ねる如くトラックに若き学徒の屍を積む  
赤くはれし乳首求めてみどりごはあはれ泣けども乳ひとしずく出  
ず

福原静男（農業）

手を合わせ救いもとめし人人よ遁れしあとも面影去らず

古川春子（教員）

石油かけて人の山を焼く惨酷もたたかひなれば省りみるなし  
原爆乙女と宣伝されつその深き胸のかなしみにふるることなく

増岡敏和（工員）

一ヶ月も二ヶ月後も人間の束が積んでは焼かれお化けの束が積ん  
では焼かれ  
「安らかに、過ちはくりかへしません」という墓碑銘はウォール街  
にでんと建てよ

益田美佐子（教員）

愛し子の屍を焼くと野に積みし薪に火をつく音にも泣きつつ  
独子に吾が傾けしこの生命今は幾百の教え子に注がむ

三浦春雄（工員）

ケロイドを気にして休む少女あり運動会の日は朝より晴れて  
爆心地を清掃しるる日雇婦等戦争後家の名が多かりき

六十部かず緒（受刑者）

靴みがく兎に父母はと尋ねればピカドンで死せりとそつげなく云  
ふ

村上 弘（公務員）  
焼け爛れ恥部も露はに乱れたる女も居りき火傷の群に

森千エ子（無職）  
赤チンをぬりたる負傷者列なして魚ならべし如く横たふ  
始め二三日親切にせし村人も臭しといひて近寄らずなりぬ  
死に残りは早く帰れと悪しざまにののしられ身の置き所なし

森田良正（公務員）  
比治山の上の異形の建物が人間モルモットの試験場とか

山本紀代子（主婦）  
生き乍ら身体焼かれて帰り来し子をほめやるもいまはのきはに  
唯一人残りゐし男の子を原爆に死なせしうらみつくる日あらず

山本雅子（主婦）  
ピカハゲと嘲けらるとも堪えて来し堪えがたきものは再軍備なり

吉井清雄（無職）  
原子爆弾の威力のまへに夜毎われ竹槍振りしおろかさを恨む

吉田幸夫（学生）

火の海にのまれし友が吾れの名を叫びる振返りつつ逃ぐ  
共共に恐怖の一夜明かせしが吾が身にまつはる屍に驚く  
消化ポンプ握りしままに黒焦げとなりたる人は枯枝のごと  
天満川浮ぶ死体は水ぶくれ子供を背負ひし女もありて